

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
 大学院生研究
 2011年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院 コミュニティ福祉学研究科 コミュニティ福祉学専攻		
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏 名	
	コミュニティ福祉学研究科コミュニティ福祉学専攻博士課程後期課程2年	富 川 亜 紀 子 印	
指導教員	所属・職名	氏 名	
	コミュニティ福祉学研究科教授	森 本 佳 樹 印	
自然・人文・社会の別	自然 ・ 人文 ・ ☐ 社会	個人・共同の別	☐ 個人 ・ 共同 名
研究課題名	生活の支え合い（ソーシャルサポートネットワーク）の実証的研究 2		
研究組織	在籍研究科・専攻・学年	氏 名	
	コミュニティ福祉学研究科コミュニティ福祉学専攻博士課程後期課程2年	富川亜紀子	
研究期間	2011年度		
研究経費	200千円		

研究の概要（200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。）

この研究は、地域で生活する視座に立ち、暗黙知を含む地域の文化や伝統、価値や掟などに触れながら、これらを背景とした生活の支え合い（ソーシャルサポートネットワーク）について民俗学的なアプローチにより実証的研究を行う。

調査地は昨年度に引き続き、沖縄県多良間島に設定し、長期フィールドワーク展開してきた。島の伝統行事や生活場面における参与観察とナラティブインタビュー等を通して人々の支え合いの基となるものや、多良間島の「生活者の論理」について考察し、①シマチャビ（島の痛み）、②福祉専門職の養成、③「内と外」の線引き、をキーワードに結果をまとめた。

キーワード（研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。）

[地 域 福 祉] [ソーシャルサポートネットワーク] [生活の支え合い]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)**【研究目的】**

この研究では、地域で生活する視座に立ち、地域の文化や伝統、価値や掟（ローカルなルール）などに触れながら、これらを背景とした生活の支え合い（ソーシャルサポートネットワーク）への民俗学的なアプローチで実証的研究を行ってきた。(継続申請)

昨年度の研究では大きく3点の調査結果(1. 社会集団の形態が多様である 2. 良くも悪くも「家族主義」 3. 様々な「助」の形態)が得られた。しかし、島民の中には、祭祀(社会)集団等に所属することもなく、離別等により島に家族もいないという状況下に置かれている人が他の地域同様に存在している。そのような状況に加えて、経済的困難や心身の疾病・障害といった生活課題が同時に派生し、多問題化している人も見受けられた。

近隣住民(他の島民)にはその状況に気づいていないわけではない。かといって積極的にサポートを行っているわけでもない。“放っておく”“関わりたくない”というよりも、むしろ支援の手を差し出すことに二の足を踏んでいるかのように見えた。「家族、親戚がいるのに、どうして私たち(他者)が面倒をみなければならないのか」という悪い意味での家族主義が“孤立し困難を抱える人を地域で支え合う”というステージまでの壁を厚くさせているのではないのか?しかし、それはあくまでも調査者の主観であって、この考えの根底にある多良間島の「生活者の論理」を見いだせるまでには至らなかった。

なぜこのような状況を抜け出せないでいるのか?或いは、そう言っておきながらも(「多良間のすごいところは、問題を問題にせず、なにげなく解決していくところ」という住民の発言に現れるような)実際には見えないところできにかしらのサポートが機能しているのか?

この課題は本研究の重要課題でもある。今年度は多良間島に滞在しこの課題を解明していくための調査研究を行ってきた。

【研究方法】

<前半>

2011年5月から島へ移住し、継続して関わること(長期的な参与観察)により島の生活に深く入り込み、昨年度の研究で残された課題について考察してきた。人々のつながり方の特徴を調べるために、伝統行事への参与観察と、文献研究を行い、島の人々の支え合いの根底にある社会文化的背景に迫っていった。

上記の調査を行いながら、「介護(ケア)や、障害などを抱える人々の(地域を問わない)普遍的な課題に対する支え合い」には、福祉専門職の養成が重要であるが、その機会が限られていることが一つのポイントとして見えてきた。

<後半>

前半の調査を踏まえて、明らかにしたいこと(福祉専門職養成の機会不足と、生活課題を抱える人への地域からの支援の現状)が「多良間島独特の問題なのか?」という壁にぶつかった。そのため、沖縄県内の他の小規模離島地域との比較調査を行った。(福祉専門職養成に関してはアンケート調査。地域における支援の現状に関しては、他小規模離島地域での短期フィールドワークを実施。)

【研究成果】1. 「シマチャビ」(島の痛み)

昨年度の調査では、多良間の「支え合い集団(Support Group)」は厳格な規則に縛られておらず、また流動的で多様な形態とであることから、開かれたゆるやかな集団であることが見えてきた。

今年度の調査では、「何が」人々の支え合いに機能しているのかを明らかにするために、引き続き、支え合いの参与観察を行った。その際、キーポイントとして見えてきたのが「シマチャビ」という沖縄の方言である。

研究では、外間守善(1987)の解釈をもとに「その島に生きる者同士で共有される痛みに限られる概念」として扱い、分析を行った。その結果、1) 多良間島では島の共同幻想(神の下で生かされている存在)を維持していくために語られ続けてきた物語があり、人々が支え合う動機付けとなっている、2) シマチャビを共に背負い続け、共に支え合う活動が、島の生活基盤を維持していくために必要な島独自の社会システムを形成し維持させ、「共同体としての幸福の増進」(レヴィ=ストロース 2005: 95)へつながっていること、が考察された。

研究成果の概要 つづき

2. 福祉専門職養成の課題

多良間村では、島内で生活が完結する。福祉専門職として働いている場（地域）は、彼ら/彼女らにとって、生活の場（地域）でもある。そこに、生活課題を抱える人々がいても、身近なところでアンテナを張る人がおり、必要な支援をタイミング良く開始することができるのが、多良間島のような地理にある地域の強みだと考えるのだが、小規模離島という地理的・社会的環境から、支援の方法について学ぶ機会が限られているのが現状である。

多良間村における福祉専門職の養成は、デイサービス事業を展開している社会福祉協議会が中心となって、年に3～4回程度、島外の講師を招いて研修会が行われている。島外の研修会に参加するには費用がかかり、移動時間の関係で業務に支障をきたすことなどから、個人での参加については積極的には聞かれなかった。

そこで、他の小規模離島地域では、福祉専門職の養成はどうなっているのか、アンケート調査を行った。回答数は少ないが（17件）次のようにまとめられた。

- （1）地域包括支援センター（行政）や、社協が事業主体となっている介護保険事業所では、専門職が島外の研修会への参加する際、費用等の支援を行っている
- （2）社会福祉法人が運営主体となっている特別養護老人ホームでは、職員が講師となり施設内での研修をとおして養成に力を入れている

また、共通して「専門職、有資格者の確保が困難」「村外から専門職を迎え入れる厳しさ」などの声が上がっており、地域の人々が福祉専門職に関心を持ち、働く機会の提供や、資格取得に向けた講習会の開催についての外部からの支援の必要性は、小規模離島地域全体の課題として理解できた。

3. 「内と外」の線引き

多良間島では、上記のような地域性があるにもかかわらず、どの集団にも所属していない（或いは関係が希薄な）住民もいる。岡村重夫は「相互扶助とか隣保相扶は、『よそのもの』（他所者）に対しては、援助の原理になりえない。これが相互扶助の限界」（岡村 1983:9）と述べているが、「島の人々はみんな親戚、家族」という意識がある反面、「家族がみるべき」という意識も強いがために、「よそのもの」ではないのに「援助の原理」に包み込まれない人が見受けられた。ここまでが、昨年度の残された課題である。

この課題を少し離れた所で考えるために、別の小規模離島（A島）へと足を運び、短期フィールドワークを行った。その島で、高齢者や子育て世代の方々に「島の人々はみんな親戚ですか？」と尋ねると、口を揃えて「違う」と言う。「血のつながりのある家族ではないけど、これだけしか人がいないから、みんな家族“みたいなもの”さー。」と話し、島は、一つの同族団からなるのではなく、いくつかの同族団があるという話までしてくださった。かといって、A島の人々は家族、親戚だけで相互援助しあっている様子ではなく、できる人ができること（例えば、足の不自由な隣人宅へ、膝痛はあるが歩行は可能な店主が買い物を届けてあげる、など）を意識して生活の支え合いが行われていた。

A島でのフィールドワーク中、島の人々と話していくうちに、「島の人々はみんな家族」という多良間島の人々の意味することが読めてきた。それは、私＝ヨソ者に対する「内と外」の線引きではないだろうか。実際、多良間島の人々は、転勤など一時的に島で生活する人には「旅の人」と表現し、島外から嫁いでくる女性には「多良間ヨメ」と表現し、多良間の血筋の人（内）と、そうではない人（外）とを区別する。それだけではなく、多良間の人同士も明確にグループ分けされることもあり（伝統行事の活動の縦割り運営など）、それらを考察すると、「内と外」のラインを互いに示しあうのは、島内ですべてが完結する生活を長いこと続けてきた人々にとって、合理的な生き方の根底となるもの（＝生活者の論理）なのだろう。生活課題を抱える当事者との間に「内（当事者とその家族）と外（支援者）」の線引きをする島の人々の意識は、いわゆる「島の風土」がヨソ者のいう「社会福祉の価値観」に先だった結果だと考えられる。また、共に生きてきた地域住民は支援の手を差し出すことを拒否していたのではなく、「ずっと隣で見てきたその人の生き方を、心配ながらも尊重していた」ということも理解できた。

【残された課題】

これまで、沖縄県内の過疎地域を調査対象地域に設定してきた。今後は沖縄本島都市部での調査を行い、地域の歴史文化や経済環境が生活の支え合いとどのように関連しているのか、或いは、普遍的な要素は何かについて考究を重ねたい。

<引用文献>

- C. レヴィ＝ストロース（2005）『レヴィ＝ストロース講義』
 外間守善（1987）「島痛み（シマチャビ）の歴史に学ぶ」『日本文学誌要』36
 岡村重夫（1983）『社会福祉原論』全国社会福祉協議会

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

①雑誌論文 (研究ノート)

富川亜紀子、「『シマチャビ』と『支え合い』のエスノグラフィー」、コミュニティ福祉学研究科紀要、10号、2012、63-38.

③シンポジウム・公開講演会等

「社会福祉公開セミナー」、2011年6月25日、沖縄大学

④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

学会発表「日本社会福祉学会九州部会大会」2011年6月18日～19日

学会発表「日本社会福祉士学会全国大会」2012年6月2日～3日 (※採否結果待ち)

学会発表「日本地域福祉学会全国大会」2012年6月9日～10日